

という事になつたのではないだろうか。千代田においては、まだ穀桑農業に依存している事は、自然条件が悪い他に、位置的に甲府盆地から隔離しているという事が、色々の意味で、その農業形態を停滞させているように思われる。

現在のように地域相互間の関連範囲が広まり、密接になつており、科学技術と進歩している時代は、昔より更に多くの人間活動の種類があると言える。そこで、地域の中で勤めく一箇の人間というものが、一体何を考え、何を目ざしているのか考える必要があると思つた。農業経済を見る上では、自然条件や経済条件が大きな要素を持つと思つたが、その他に人間の心理と考える必要があると思つた。が農村に住んだ経験がないと実感が伴わないし、一箇の人間としてではなく、集団として人間をみると実に複雑になつて、わからなくなつた。そこで主観的に考えてみるのはやめて、客観的につきはなして、地域の現象を見ようと思つたのだが、やはりそこは人間の意志というものを考慮に入れたいとうまく説明できない気がした。この論文では何故そうなつたかという事に關心を向けすぎ、因果関係の追求のようなものになつてしまつた。地域のありのままの現実をはつきりつかみ得なかつたと思つている。

秋留台地の地理学的考察

中松三和子

秋留台地は東京の西郊 40km に位置し、東西 6km、南北 5km ほど紡錘形をなしている。北と南は関東山地東縁の丘陵群に属する草花、加住丘陵が、西は背後の関東山地へと高度を増す才三系よりなる丘陵が続き、東は多摩川を挟んで武蔵野台地に面している。台地の北南、東縁を平井川、秋川、多摩川それぞれ台地面以下に数段の段丘を形成して流れている。これらの段丘はロームを欠くポストローム段丘であり、総じて 70cm 以下で礫層となつているが台地寄りでは上段からのロームの再堆積をうけて 100cm 近い腐植層を見る。

台地面はほとんど雨折をうけておらず、原地形を良く保ち、西端の 180m から東端の 140m まで均一の緩傾斜をなし、極く僅か北に傾いている。この台地面は一次ロームの存在によつて以下の面とは明瞭に区分されるが、その分佈は地形的に同一と思われる面に於て一様ではなく、平井川寄りの一帯では 20~30cm の薄い耕土の下に粘性の強いチヨコレート色の土層となりロームは認められない。以下ロームの偏在を説明すると-----。

秋川、平井川が現在の台地面に相当する部分を形成した後、山地側の上昇あるいは海退によつて流路全体の傾斜が増大した。両河川とも背後の山地から流出するが、秋川は平井川に比べ広い流域面積を持つため水量が大きく、侵食力は大きい。さて、増傾斜をうけた両河川は下刻を開始するのだが、侵食力の勝る秋川が下刻を進めて段丘崖を形成していったのに対し、平井川は充分な侵食力をとらぬ為、又しく不定の流路を取りながら次第に北へ移動していった。この時にロームの降下が行われた。既に流水から開放されていた秋川寄りにはロームの堆積が行われたが、平井川寄りではつぎつぎと降下するロームは流水によつて洗い流されて、堆積が行われぬ環境にあつた。

台地西部に接して頁岩、泥岩、粘板岩を含むオ三系が分布する。これらの岩石は細粒質よりなり未凝固であるため流水の作用を受けて容易に元の細粒質にまで分解される。平井川はこのオ三系を貫いて台地に達している。

ロームを欠く部分にみられる重粘な土壌は供給源とこのオ三系に求めることができよう。その当時平井川は下流から侵食の復活が及んでおらず、局部的な侵食基準面に対して、積が行われていたと考えれば、このように山地に近い地域で細粒質の堆積がみられることも理解できよう。

ところで、十年余を隔てる二葉の航空写真に共通して台地面上に明暗の色調差が認められ、しかもその境界はロームの有無と良く一致する。農業試験所の分析結果から色調差が腐植含有の多少によることがわかる。ロームに覆われた部分では表層で形成された腐植酸を溶した水が多孔質のローム中を深部まで移動し厚い腐植層が生成される。一方重粘土地域では小さい孔隙は重力水の移動を許さず、腐植酸を含む水は流去水となつて失われ、厚い腐植層が作られない。さらに重粘土地域の明色の原因として、乾燥時の下層からの毛管水の上昇が耕耘を受けて塊状になつた表層部に伝わらずこのため表層に閉じて極めて乾燥しやすい性質をとつことが考えられる。

南北の土壌の性質の違いは耕作票に反映されている。重粘土地域では根菜類の栽培はほとんど行われていない。重粘土は深耕が困難であり、深耕されない畑では根菜類に不正形や曲りが生じ、さらに収穫に当り抜くのは手間取る等根菜類には不適の土壌である。又乾燥を受け易い為、陸稲栽培の危険が大きいことから南部に比べ陸稲の作付は少く、輕鬆な土壌に適さない大豆、小豆が立つ。

秋留台地一帯の農家は労働力の他産業への流出が農業労働力不足をとらしている。減少した労働力に代つて耕作規模の縮小を計ることにより労働力不足を解決する者が多い。その際地味悪い畑から耕作放棄が起られるの

で、重粘土地域では荒廃農地が顕著である。

愛知県蒲郡市の地理学的考察

中村 英子

蒲郡は、知多半島と渥美半島に抱かれる三河湾の北岸に位置する。それは名古屋の南東約45kmの地点である。

平野部は、東、西及び北側を木曾山脈から連なる三河高原の南の端にあたる山地に囲まれ、南側を三河湾で限られており、その形は、東西方向の海岸線を直径とするほぼ半円形状である。地形的にはこの平野は背後の山地に起因する土石流扇状地で急傾斜をとつて三河湾に幅入でいる。この平野の東側は海抜約58mの砥神山とそれに続く100m内外の山地で豊橋平野と分かれ、西側は幡豆山地と呼ばれる中起伏山地により矢作川の低地からさえぎられている。

気候は地理的位置と、前面に海をもち三方を山地で囲まれているという地形の影響で、きわめて温暖である。昭和37年の年平均気温が15.2°Cで伊良湖岬よりやや高く、蒲郡は愛知県の中でも最も高温な地域にはいる。年降水量は、平野部で約1700mmあり、日本の中でも決して少ない方ではないが、ここは扇状地性の平野で土性があらいため、利用可能な水量は必ずしも十分とは云えない。

このような自然環境のもとに、蒲郡には、農業、水産業、工業、観光業など多彩な産業が発達している。平野の最前面を、三谷、西浦、形原港を基地とする漁業、大塚海岸、堀津海岸のノリ養殖業などの水産業と、竹島、大島大塚海岸、三谷温泉、西浦温泉などを中心として発達する観光業が占め、その背後の蒲郡町、三谷町の市街地を含む地域には綿織物工業、形原の麻織工業などの工業地域が連なる。さらにその背後が、専業的な農業地域となつている。最後部、最も山地寄りに位置を占める農業地域は山地沿いの一帯がみかん栽培地域、その内側が畜産や一部みかん栽培を組み合わせた多角的な園芸農業地域との二地域に分けられる。それでは、この総面積およそ50km²、人口8万余の小さな都市域おこゆかに多彩な産業が発達しているのは、どのような原因によるものであろうか。まず第一にあげられるのはやはり、自然条件への適合であるがその他、東海道本線沿ひにあつた蒲郡の二大中心地東京と大阪の中間的な位置を占め、名古屋に近いという地理的位置の有利性、近世における産業の隆盛などが挙げられる。